Voice System : A Cognitive Approach

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/998

ヴォイス・システム
—態間関係の認知メカニズム—

中　村　芳　久

0. はじめに

中間態 (middle voice) の研究の進展に伴って (e.g. Kemmer 1993)、能動態、受動態、中間態などの各ヴォイスがどのようなシステムを成しているかということが問題になる。とりわけ Shibatani (1998) 及び柴谷 (1997b) の、中間態から受動態への史的変化を中心論点とする類型論的研究によって、ヴォイス相互の関係が具体化したと言ってよい。そこでは、中間態から受動態への史的変化が実証されるだけでなく、能動態、再帰構文、中間態、受動態の連続性などが示唆されており、ヴォイス・システムの全貌が見えてくる。例えば、スペイン語の次のような例はそのような連続性を具現する典型である。

(1) a. Verónica se miró en el espejo. (Reflexive)
'Veronica looked at herself in the mirror'
b. Tachita se peinó. (Body-action middle)
'Tachita combed herself'
c. Tachita se sento. (Body-action middle)
'Tachita sat down.'
d. Las gafas se quebraron. (Spontaneous middle)
'The glasses broke'
e. El edificio se construyó en 1982. (Passive)
'The building was constructed in 1982.'
f. Esos problemas se resuelven por autoridades competentes. (Passive)
'Those problems are solved by competent authorities.'

(柴谷 1997b : 20)

能動態と隣り合わせの再帰的能動態 (1a) が、連続的に展開しながら、自発的意味を表す中間態 (Spontaneous middle) を経由して、最終的に (1) (e) (f) の

受動態を発達させている。

Shibatani(1998)の注目すべき論点は、(i)能動態と中間態は意味的対立であり、(ii)能動態と受動態は文法的対立であるとされ、(iii)中間態から受動態に史的に変化する、という点であり、これによって各ヴォイス間の連続性の性質まで明らかにされたことになる。ここにはしかし、表面上次のような問題がある。(i)(ii)を考慮すると(iii)の変化は、能動態と意味的対立にある中間態から、能動態と文法的対立にある受動態への変化であるから、この変化は文法化である。そこで、上の中間態(1d)から受動態(1f)への変化(すなわち文法化) をみてみると、(1d)が表わしているのは「変化」だけであるのに対して、(1f)の方は「変化+行為者の働きかけ」を表しており、(1d)から(1f)への文法化は意味の増加を伴っていることになる。基本的に文法化には意味の漂白化・抽象化を伴うので、中間態から受動態への文法化は一見、意味の漂白化に逆行しているように見える。どうしてこのようなことになるのか。本稿ではこの問題ついて、英語の受動態を Shibatani の論点と突き合わせながら認知的観点から詳細に分析し、さらに通言語的なヴォイス・システムについても認知的考察を加え、解明を試みる。

具体的には「語彙同様文法形式も意味をもつ」という認知文法の観点から、英語の受動態の各用法に認知構造を与え、認知構造間のネットワークを構築していく過程で、能動態と中間態の対立が意味的であるということ、あるいは能動態と受動態の対立が文法的であるということの認知的側面が明らかにされる。それによって先の文法化の問題が解決し、同時に文法化の本質的側面が明らかになる。英語の受動態の認知的分析から得られる知見を基に、通言語的なヴォイス・システムの認知構造ネットワークが措定され、その詳細が明らかにされる。

1. 英語の受動態の認知構造

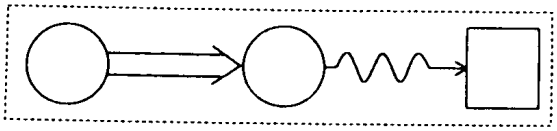
スペイン語の、se をとる再帰構文的な受動態とは著しく異なって、英語は be + p.p. + by NP という分析的な形式である。be + p.p. の多義的な認知構造を、Shibatani(1998) の論点を考慮しながら、Langacker(1990b)に基づいて分析し、続いて be と p.p. がどのような意味合成の仕方をするのか、どうして前置詞 by によって行為者が表せるのかを示す。

1.1 be + p.p. の認知構造ネットワーク[1]

使役構造の最小単位を用いることによって、be + p.p.構造の表す意味の

全貌を明確に表示することができる。使役の最小単位とは、ある参与体が別の参与体へ働きかけをし、働きかけを受けた参与体が変化するような因果連鎖の最小単位であり、その認知構造は次のように図示される。

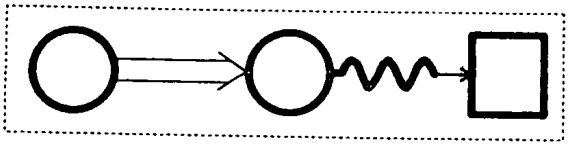
(2) 使役の認知構造



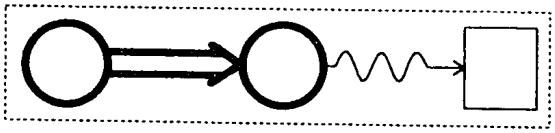
この図で、二つの円はそれぞれ働きかけをする参与体と働きかけを受ける参与体を表し、その間にある二重線矢印が働きかけを表している。波線矢印とその先端の四角は、働きかけを受ける参与体の状態変化（や位置変化、つまり移動）と変化後の状態（や移動後の位置）を表している。

一般に、言語形式の認知構造は「認知ベース上の卓立部」(a profile imposed on a base)という形で与えられる。いま(2)の使役構造を認知ベースとして、break, kill のような break 系動詞の認知構造と kick や hit のような kick 系動詞の認知構造を対照的に示してみよう。break 系動詞の場合、働きかけはどのようなものでもよく特定されていないが、働きかけを受けた参与体がどのような変化をするかは特定されている。特定されている部分（卓立部（profile）という）を太線で示すと、break 系動詞の認知構造は(3a)のようになる。各参与体、単線の波線矢印、それに四角（変化後の状態）が太線で示される。break 系動詞の認知構造は、働きかけを受ける参与体が、どう変化するかに注目して叙述する動詞群だということである。

(3) a. x break y の認知構造



b. x kick y の認知構造



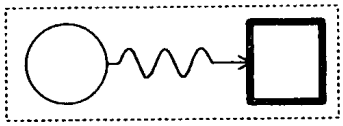
これに対して、kick 系動詞は、対象がどう変化するかは特定せず、どのような働きかけをするかに注目する動詞群であり、その認知構造では、働きかけを表す二重線矢印のみが太線で表される。break 系動詞と kick 系動詞は、

同じ使役構造を認知ベースとし、卓立部を異にする対照的な2つの動詞群だということである。

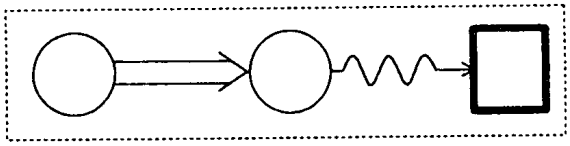
さて be ＋ p.p. 構造も言語形式であるから、その認知構造は認知ベース上の卓立部として表示される。be ＋ p.p. 構造は、行為者を表さず、使役構造（認知ベース）の行為者を除くどの部分を卓立部とするかによって3種類がある。すなわち、次の(4)(a)(b)(c)のように、変化後の状態(四角)、変化（波線と四角)、働きかけと変化（二重線矢印と波線と四角)、のいずれかを卓立部とする3種類である。(a)の変化後の状態を卓立部とする場合には、自動詞を過去分詞とする場合(i)と他動詞を過去分詞とする場合(ii)の二種類がある。

(4) be ＋ p.p. の認知構造

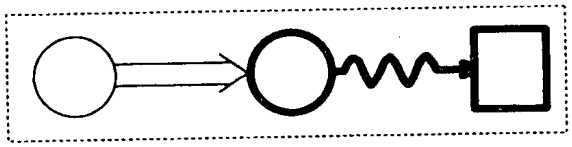
a. (i)



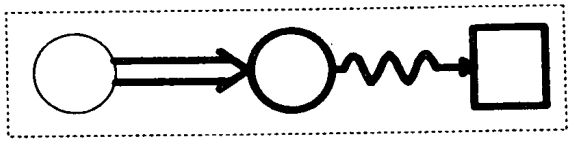
(ii)



b.



c.



それぞれに対応する具体例として、まず(4a)(i)には次のような例が対応する。

(5) a. My wrist is all swollen.
b. Janice is gone.
c. The sidewalk is cracked.

このような例に表れる be ＋ p.p. は OE 期に普通に存在した自動詞の完了形の名残であるが、swell, go, crack のような自動詞の表す変化の最終状態を表しているから認知構造では、四角の部分が太線で示されることになる。ただし、ここに現れるような自動詞は一般に行為者や働きかけを表さないから、その認知構造の認知ベースは、使役構造ではなく、変化の部分のみである。例えば、be swollen は、動詞 swell の表す「腫れてない状態から腫れた状態への変化」を認知ベースとして、その最終状態を際立たせる。

ところで、この構造に表れる自動詞は非対格動詞のみであり、次のような非能格動詞は表れない。

(6) a. ＊He is walked.
　　b. ＊He is danced.

非能格動詞は、go のよう非対格動詞が移動後の位置を含意しているのと違って、移動後の最終着点を表さない。従って、be ＋ p.p. 構造でその部分を際立てることができないのである。ただし、次のように all や out を付加することによって、踊りきった後の疲れた状態（最終状態）を表すようにすると、be ＋ p.p. 構造での表現が可能になる。

(7)　　He is all danced out.

(4a)(ii)を認知構造とする例は、他動詞をとる次のような場合である。

(8) a. My arm was (so) burned (I could hardly moved it).
　　b. The town was (already) destroyed (when we got there).

いずれの場合も、「腕」や「町」が何らかの働きかけを受け、変化した後の状態を際立てていると言うことができる。

次に(4b)を認知構造とする例としては、次のようなものがある。

(9) a. Chomsky was born in 1928.
　　b. I was surprised at Mary's behavior.
　　b. My arm was burned (as soon as I reached into the fire.)

何らかの原因があって、それぞれの事態が生じる（つまり、変化が生じる）のであるが、卓立部として言語化されているのは、「生まれていない状態から生まれた状態への変化」や「驚いてない状態から驚いた状態への変化」のみである。このような例が「働きかけ」を表わさないことは、行為者や使役者を表す *by*-phrase をとらないことから明白である。

(4c)の認知構造に対応するのは、次のような例である。

(10) a. I was surprised (by Mary).
b. The town was destroyed (house by house).

この場合、何らかの働きかけを受けて、ある一定の変化をしたことは明らかであり、行為者や使役者だけを伏せて、働きかけを受ける参与体を中心に叙述しているので、その認知構造では、変化の他に、働きかけの部分も太線で示されることになる。(4c)の認知構造で、働きかけが卓立化されているから、（必要であれば）行為者を *by*-phrase によって指定することもできるわけである。

いま3種類の認知構造を検討したが、その共通点は、変化後の最終状態を卓立部とするという点であり、従って、その点がこれらの認知構造のスキーマといえる。しかし、能動態との対応という点からすると、(4a)（とりわけ(4a)(ii)）は、最終状態しか表しておらず、能動態と対応しているとは言い難い。また(4b)も、変化だけしか言及しないので、これも能動態と厳密な対応関係にはない。(4c)だけが、働きかけも変化も表しており、能動態の表す意味量にもっとも近く、能動態と交替関係にある。

さらに「中間態から受動態への史的変化」ということとの関連で言えば、中間態と同等の意味内容（すなわち「変化」のみ）を表す be ＋ p.p. 構造(4b)から、(4c)の受動態へ拡張した（文法化した）とすると、この場合も、スペイン語の場合と同様、(働きかけを表すようになる分だけ)意味量が増加しており、通常の文法化に伴う意味の漂白化に逆行しているように見える。

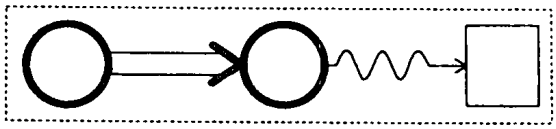
さて、これまで検討した3種類の認知構造は、変化後の最終状態を卓立部とする点で共通していたが、変化後の最終状態を卓立部とすることのできない場合がある。一つは、kick 系動詞や touch 系動詞のように対象の状態変化を特定しない動詞が be ＋ p.p. に現れる場合で、もう一つは、know

（知っている）や surround （囲んでいる）のように、最初から状態のみを表し、「変化」を表さない状態動詞が be ＋ p.p. 構造に現れる場合である。これらの動詞は、対象の状態変化を表わすことがないので、変化後の状態が生じることがないのである。このような動詞の現れる be ＋ p.p. 構造では、働きかけを受ける参与体が際立つ（すなわちトラジェクターになる）ということのみが生じている。

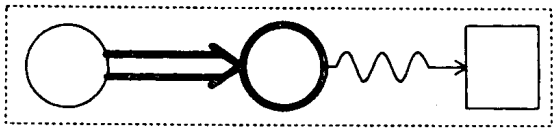
kick 系動詞と touch 系動詞の場合から見てみよう。kick 系動詞は(3b)ですでに見たように対象の状態変化を特定せず、touch や kiss などの touch 系動詞は、接触を表すだけで、変化も働きかけも特定しないから、x kick y や x touch y の認知構造は(11)(a)(b)のように表示される（kick の認知構造は(3b)の再掲）。x touch y の認知構造(11b)では、接触部（二重線矢印の先端）のみが太線で示される。

(11) a. x kick y の認知構造

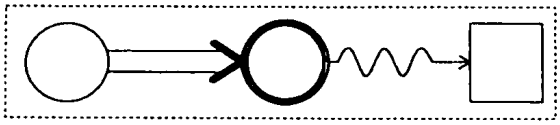
b. x touch y の認知構造



(12) a. y be kicked (by x) の認知構造



b. y be touched (by x) の認知構造



(11)で重要なことは、働きかけをする参与体が、もっとも際立ちの高い、第一際立ち参与体（トラジェクター、tr）で、働きかけを受ける参与体はその次に際立ちの高い、第二際立ち参与体（ランドマーク、lm）だという点である。そして、通常 tr が主語で、lm が目的語で表される。(12)の受動態の認知構造を見てみよう。kick や touch が対象の変化を表さないので、be kicked,

be touched のように受動化されても、変化後の最終状態を表し得ず、参与体間の際立ちシフトだけを表すことになる。すなわち、受動態では、能動態の tr が言及されないので、lm が唯一の参与体となり、(従ってそれがもっとも際立ちの高い参与体となるから) 自動的に tr へと昇格するというわけである。これが kick 系動詞や touch 系動詞の受動化における、参与体間の際立ちシフトである(厳密には、トラジェクター・シフト)。tr が主語で表されるという認知的規定に従って、受動態では、能動態の目的語が tr に昇格するために、それが主語で表されるというわけである。(4)(a)(b)(c)で扱った be+p.p. の認知構造では、変化や働きかけのどの部分を卓立部とするかということであったが、ここでは、働きかけを受ける参与体が tr に昇格するということだけになっている。

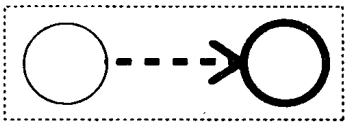
もう一つ、状態動詞の表れる be + p.p. 構造を見てみよう。

(13) a. All serious scholars know these facts.
　　 b. A moat surrounds the castle.
(14) a. These facts are known by all serious scholars.
　　 b. The castle is surrounded by a moat.

事実が知れ渡った時点で、事実が陳腐なものになるという変化があるかもしれない。城が濠に囲まれた時点では、城はより安全なものになるという状態変化が見られるかもしれない。しかし、ここでは能動態、受動態ともに、状態を叙述しており、受動態が変化の最終状態を表すということはない。この場合も、kick や touch の場合と同じで、受動化によって生じているのは、能動態の lm が tr へ昇格するという参与体の際立ちシフトのみである。この様子を、心的接触を表す know の場合で示すと、x know y, y be known (by x) の認知構造はそれぞれ次のようになる。破線矢印は、x から y への心的接触を表している。

(15) a. x know y の認知構造

b.　y be known (by x) の認知構造

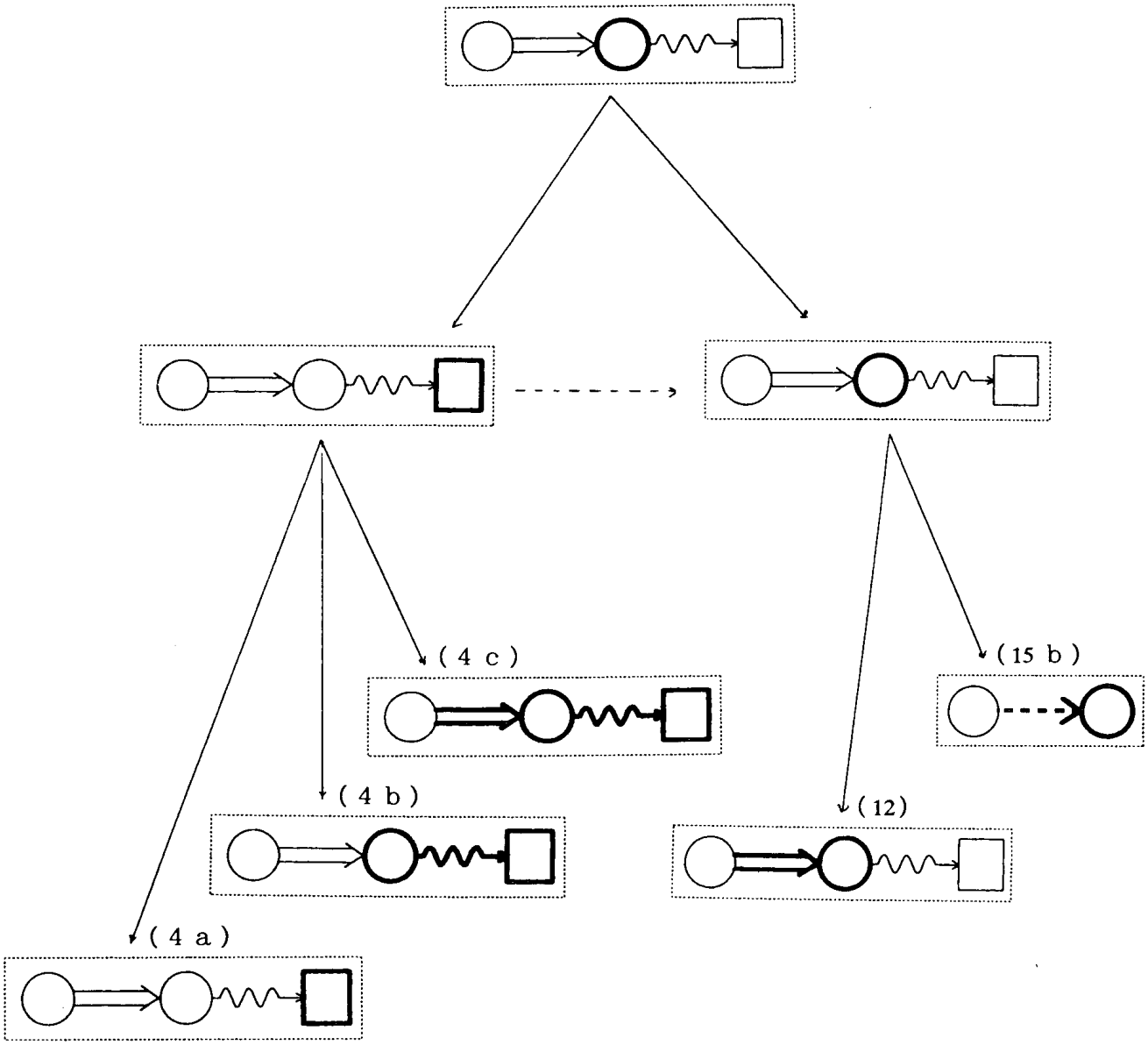


(15a)では、心的接触をする方が tr であるが、(15b)では、心的接触を受ける方(つまり、能動態の lm)が tr になっている。両者の違いはこれのみである。(12)と(15b)に共通する認知構造(すなわち両者の認知構造のスキーマ)としては、使役構造を認知ベースとし働きかけを受ける参与体を tr とするような認知構造を措定することができる。

さて、(4)の3種類の be ＋ p.p. 構造のスキーマは、使役構造を認知ベースとして最終状態を卓立部とするような認知構造であった。このスキーマと、(12)(15b)の認知構造のスキーマ(能動態の lm を tr とする)とには、共通するところはないのだろうか。(4)のスキーマでは、対象の変化後の最終状態を卓立部とするということであったが、このように最終状態が際立つということは、働きかけをする参与体が言及されずに、最終状態にある参与体(働きかけを受ける参与体、すなわち能動態の lm)が際立つ(tr になる)ということである。そうすると、このスキーマと、be kicked/touched/known のスキーマとは、能動文の lm が tr に昇格するという点で共通であり、そのような認知構造(つまりは、be kicked/touched/known の認知構造のスキーマと同一のもの)を、be ＋ p.p. の最上位のスキーマとして措定することは十分可能である。こうして得られる最上位スキーマ、そしてその2つのサブスキーマ、さらにそれらを例示する個々の具体的な認知構造を、ネットワークとして示すと(16)のようになる。

(4)の各認知構造から、卓立部を差し引いて(抽象して)、参与体の際立ちだけを表すようになった be ＋ p.p. の用法が、be kicked/touched/known の be ＋ p.p. であるとすると、それはスキーマ化(schematization)であると言える。しかし、卓立部(profile)と tr/lm の際立ちは、レヴェルを異にする際立ちであり、この点を重視すると、前者の用法から後者の用法への変化は、拡張(extension)ということになる。(16)では、この点に注目して、(4)の認知構造(スキーマ)から、be kicked/touched/known のスキーマへの用法の変化を、拡張と見なし、破線矢印(拡張を表す)で表示している。

(16) be ＋ p.p. 構造の認知構造ネットワーク



またこのネットワークで、カテゴリー・プロトタイプとしては、働きかけを受けて変化する参与体を主語とする受動態(4c)の認知構造を有力候補としてよいだろう。

さらに、be kicked/touched/be known のスキーマの認知構造が、使役構造を認知ベースとしているのは、以下に見るように、be known の場合であっても、心的接触を受ける参与体が、ある種の原因によって何らかの変容を被っていなければならないからである。

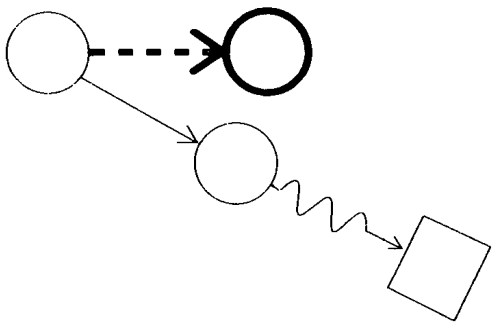
know の場合、次のような容認度の差が生じるのは、一人の人間に知られるということが、必ずしも知られる参与体の状態変化を含意せず、多くの人

に知られるということが、these facts が陳腐な、あるいは常識的なモノになるという状態変化を含意しやすいためである。

(17) a. These facts are known by all serious scholars.
b. ?These facts are known by me/him/John.

know の場合、心的接触を受ける参与体が、その心的接触によって（陳腐なものにするというような）何らかの状態変化を引き起こしている場合のみ受動態が可能であるから、y be known (by x) の認知構造は、厳密には次のように表示される。

(18)



この図で、「知られる」ことから、例えば「対象が陳腐なものになる」（あるいは「有名になる」）というような状態変化が生じているという話し手の認識は、右下方への因果連鎖 (causal chain) で示されている。この因果連鎖で、単線矢印は働きかけが間接的であることを、二番目の円は心的接触を受ける参与体と同じ参与体であり、それから出る波線矢印と四角は、水平の使役連鎖の場合と同様、変化を表している。この連鎖がすべて細線で示されているのは、認知的な際立ちがなく言語化されていないためである。この部分は、be known の認知ベースの一部である。同じような右下方への因果連鎖は、(14b)の be surrounded の認知構造にも、その認知ベースの一部として含まれていなければならない。「濠に囲まれている」という事態が、城を攻めにくく、あるいは近づきにくく、あるいは他の城とは違ったものにしているという認識が話し手に存在するからこそ、受動態が使われるということである。

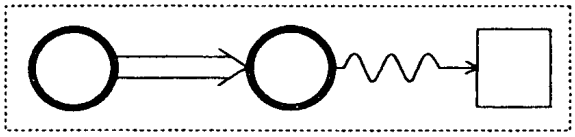
Bolinger (1975) などの指摘から十分予測できるように、次のような疑似受動文の例も同様に分析される。

(19) a. ＊The bridge was walked under by the dog.
b. The bridge has been walked under by generations of lovers.
(20) a. The emeny base has been flown over several times.
b. The valley has been marched through in two hours.

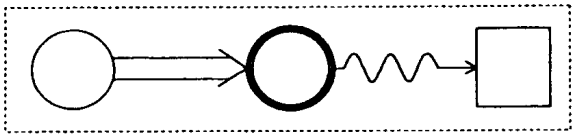
(19a)の場合、犬が下を通るったことによって、橋が状態変化したという認識は生じにくいが、(19b)の「橋」は、恋人たちが下を通ることで有名になっているということがあり得るし、(20a)の「敵陣地」は、その上空を飛行できたことで、攻略しやすい陣地であるということになり、また(20b)の「谷」は、渡りやすい谷であるということになり、受動態による表現が可能になっていると言える。従って、これらの可能な受動態の認知構造には、何らかの影響による状態変化が認知ベースの一部として存在するということである。上のネットワークの、be kicked/be known のスキーマとしての認知構造は、以上のように、言語化されている意味内容（卓立部）そのものは使役構造ではなくても、副次的に(認知ベースとして)、使役構造が認識されているような場合の受動態も含めた認知構造である。

(16)のネットワークの最上位にある認知構造は、多義的な受動態のさまざまな認知構造のスキーマとしての認知構造であるから、交替関係にある能動態と受動態のそれぞれの認知構造のスキーマは次のように、tr/lm 配置という点で対照的に示される。

(21) a. 能動態の認知構造



b. 受動態の認知構造



能動態も受動態のいずれも、認知ベースは使役構造であるが、どの参与体をtr(トラジェクター、第一際立ち参与体)として選択するかという点だけが対照的である。能動態は、働きかけをする参与体を tr，働きかけを受ける参与

体を lm とするが、受動態では、後者が tr である。このように、能動・受動の交替は、参与体の際立ちシフトである。

ここで、能動と受動の対立が、認知的には、参与体間の際立ちシフトであるということは、「能動・受動が文法的な対立である」ということと深く関連している。また、例えば 'The glasses broke' のような中間態と 'They broke the glasses' のような能動態は、意味内容（の量）の対立であり、そのために「能動態と中間態は意味的な対立である」ということになる。そうすると、ある形式が「中間態から受動態へ史的に変化する」ということは、意味内容（の量）を反映する形式から、参与体の際立ち（どの参与体を tr とみなすか）を反映する形式へ変化する、ということになる。その点、英語の be ＋ p.p. 形式は、例えば(4b)でのように最初「変化」という意味内容を中心に表していたのが、kick 系・touch 系動詞や状態動詞のような状態変化を内包しない動詞をとるようになって、参与体の際立ちシフトのみを反映するような形式へと変化しており、英語の be ＋ p.p. 構造にも「中間態から受動態へ史的変化をした」という側面が見られる。[2] また、「中間態から受動態への史的変化」ということは、能動態と「意味的に」対立する中間態から、能動態と「文法的に」対立する受動態へ変化するということでもあるから、この変化の過程は、文法形式が創発（emerge）する過程、すなわち文法化の過程であると言ってよい。文法化については、一般に意味の漂白化・抽象化ということが伴うが(Hopper and Traugott 1993)、英語の be ＋ p.p. 形式の場合、最初意味内容を中心に表していたのが(cf. 4a, 4b, 4c)、参与体の際立ちのみを問題にするようになる（cf. 12, 15b）ので、意味の漂白化・抽象化も生じていると言える。文法化で重要なことは、むしろ、概念形成者の認知プロセスのみを表すようになる傾向があるという点で(Langacker to appear, 中村 1997a)、be ＋ p.p. 構造も、参与体の際立ち認識（認知プロセス）のみを反映するようになるので、この点も満たしている。

本節では、認知的観点から英語の be ＋ p.p. 構造を分析し、Shibatani (1998)あるいは柴谷(1997b)の論点との対応を確認したのであるが、ここでの知見を基に一般的な議論を第2節で行うことにする。その前に、英語の受動態について2点考察しておく。

1.2 be ＋ p.p. の意味合成

前節では、be ＋ p.p. 構造が全体としてどのような認知構造を表しているかということを分析したが、be ＋ p.p. は合成構造であり、be と V(動

詞）と -en（過去分詞形態素）から成っている。合成構造の意味の少なくとも一部は、各構成要素の意味の和である。[3] be ＋ p.p. の場合、まず V（動詞）と -en の意味が合成され、次にこの意味と be の意味とが合成される。一般に意味合成の仕組みは次の通りである。2つの構成要素があるとき、一方の意味の内部にスキーマ的な下位構造（部分）があって、そこに他方のより具体的な意味が流入する形で合成される。[4] broken の認知構造は、break と -en の意味合成によって得られるが、-en は、動詞一般の表す意味「過程」（process）の最終部分を際立て、そのスキーマ的な「過程」の部分に break の具体的な意味「割る・折る」が流入して、 broken は、「割る・折るという過程の最終状態」すなわち「（対象の）割れた・折れた状態」を表す。be は「一定の期間ある状態が続くこと」を表すが、そのような状態（スキーマ的な内容）に、例えば broken の具体的な意味が流入して、be broken は「何かが一定期間割れた状態にある」というような意味を表すようになる。be は p.p. の表す具体性の高い「非時間的な関係概念」を「時間的な関係概念」に転換する機能のみを有する（このため、次の合成段階で時制形態素と意味結合することが可能になる）。従って、前節で見た be ＋ p.p. の数種の認知構造はほとんど p.p. の貢献であると言ってよい。

be ＋ p.p. で「変化後の状態」を表す p.p. は、完了形 have ＋ p.p. の p.p. とも連続的である。周知の通り、例えば I have finished my homework. は歴史的には I have my homework finished.（「私は終えた/終えられた宿題をもっている」）のような形式からの発達であり、この形式の p.p. は形容詞として「変化後の状態にある」ということを意味していた。このような p.p. が形容詞として、目的語を修飾していたことは、OE の(22a)の例に明白である。この例の過去分詞 *ofslægenne* の活用語尾 -ne（対格）は、hine と格が一致しており、hine を修飾していることは明らかである。

(22) a. ...*hie hine ofslægenne hæfdon* (Parker MS)
'they him slain had'
b. ...*hig hine ofslægen hæfdon* (Laud MS)

同じ OE 期の後の写本（Laud MS）では、同じ箇所の同じ過去分詞の格変化語尾が落ちており、このような現象から、Barbar（1988:145）は、OE 期にすでに、過去分詞は形容詞として目的語を修飾する機能を弱め、have とより強く結合し完了形を確立しはじめていると推論している（cf. Carey 1995）。こ

のように、起源的には「変化後の状態」を表す同一の p.p. が、一方では、be ＋ p.p. という形式で受動態へと拡張し、また一方では、have ＋ p.p. という形式で完了形へと拡張していったと言うことができる。すでに述べたように前節で扱った、be ＋ gone のような自動詞をとる be ＋ p.p. 形式は、実は OE の完了形(OE では自動詞の完了形の助動詞は beon, weorthan) の名残でもある。

最後に、次のような構造の繰り上げ受動態が、どのような参与体の際立ちを表しているか見ておこう。

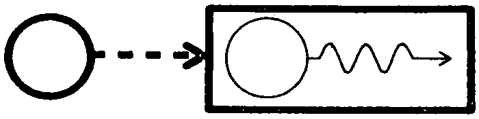
(23) a. John is believed to come in time.
　　 b. John is expected to come in time.

これらと対応する能動文が、どのような参与体を際立てるかが参考になる。

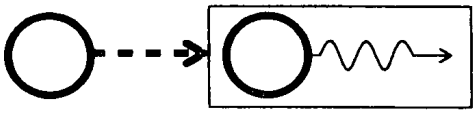
(24) a. Everyone believes that John will come in time.
　　 b. Everyone believes John to come in time.
(25) a. Everyone expects that John will come in time.
　　 b. Everyone expects John to come in time.

(a)文(b)文ともに、tr はいずれも everyone であるから、(a)文と(b)で異なっているのは、lm として何が際立っているかである。(a)文の場合、that 節が目的語だから、that 節の表す命題が lm として際立ち、(b)文では John が目的語だから、命題内の John が lm として際立っていることになる。それぞれの認知構造は次のように示される。左端の円から出る破線矢印は、believe/expect などに共通する心的接触を表す。

(26) a. (24)(25)の(a)文の認知構造



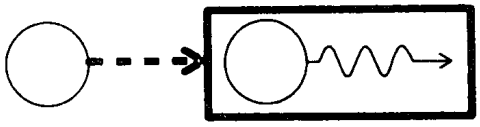
b. (24)(25)の(b)文の認知構造



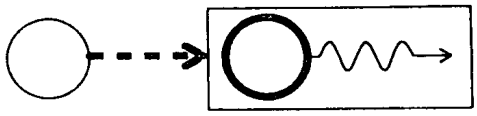
命題を長方形で表すと、(a)文では心的接触を表す破線矢印がその長方形に達し、その長方形が太線で表され、(b)文では、命題内の John を表す円が太線で表示されることになる。

これらの認知構造で、次の(27)(a)(b)のように、tr が際立ちを失い、lm が第一際立ち参与体(tr)になり、それらを主語で表す言語形式が、受動文の(28a)と(28b)である。

(27) a.



b.



(28) a. That John will come in time is believed/expected.
b. John is believed/expected to come in time.

従って問題の受動文の認知構造は(27b)のように表される。そしてその受動文の to 不定詞句は、Jonh について、信じられ・期待されていることを、(実働部として) 追加的に表現している (追加的であるから際立ちはない)。次のような例の to 不定詞句も同種であって、例えば(29b)で、「ホンダ車は簡単だ」と言ったときに、「ホンダ車をどうすることが簡単か」は (コンテキストなどから明白であり、従ってその情報には際立ちを与える必要がないので) 付け足し的に不定詞で表現されるというわけである (cf. Langacker 1995)。一般に to 不定詞句は、際立ちの一段落ちた命題内容を表す。

(29) a. This stone is heavy to lift up.
b. Honda is easy to fix.

1.3 *by*-phrase

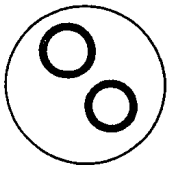
英語の受動文で、行為者を明示する必要がある場合 *by*-phrase によって表現されるが、元来「そばに」あるいは「寄り添って」というような空間的な近接関係を表す前置詞 by が、どのように受動文の行為者を表すのだろう

か。前置詞 by の用法は以下のようにさまざまであるが、基本的に空間的な「そばに」や「寄り添って」関係の拡張と見てよい (cf. Langacker 1990b)。

(30) a. The willow tree is by the river.
b. Jack is by himself upstairs.
c. That's OK by me.
d. That sculpture is by Rodin.
e. The applause was by everyone in the room.
f. Bragging by officers will not be tolerated.

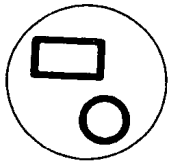
(a)では「柳の木」と「川」が空間的な「そばに」の関係にあるが、一般に二つの参与体が、次の絵図で示されるように、近接域のなかにあると、x be by y の形式で言語化される。

(31)



(b)は、「自分のそばにいるのが自分自身」ということで「一人で」を表す。(c)は、That's OK. という命題が、「私」と「そばに」の関係にある、つまり、命題が排斥されていないということであり、「私は了承だ」という意を表す。この用法は、空間的な「そばに」関係からのメタフォリカルな意味拡張と見なすことができる。「了承」と「私」との「そばに」関係は、命題を表す長方形と、私を表す小円が近接域内に存在する形で示される。

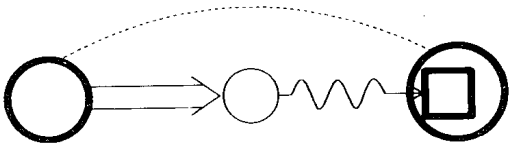
(32)



また、(d)の制作物と制作者も、一方が存在しなければ他方は存在せず、「そばに」の関係にある。また、制作者が何かを制作するという行為は、「制作者が材料や素材に何らかの働きかけをし、それを変容させて、作品として仕上

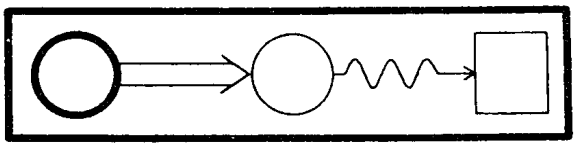
げる」ということであるが、使役の認知構造と同じように、左端の円（制作者）から二重線矢印（働きかけ）が出て、それが次の小円（材料や素材）に至り、その材料が四角（作品）へと状態変化する、というように表示することができる。作成行為が単なる使役と異なるのは、制作物が通常は制作者に所属し、作品のような場合は制作者がだれであるかということが常についてまわるということである。このような意味でも作品と制作者は「そばに」の関係にある。この点は、図では、変化後の四角（制作物）が、左端の円（製作者）と同一指示の円に包含される形で示される。点線の対応線が両円が同一指示であることを示している。

(33)



(30) (e) (f) は、行為と行為者の関係であるが、作品と制作者の場合と同じように、一方が欠ければ他方は存在し得ないので、強い「そばに」関係にある。この場合の「そばに」関係は、次のように、行為全体を四角で囲んで表示すると、行為が行為者を包含するような形で表される。行為者は行為の始端参与体(initiator)であるから、行為者は行為成立のための不可欠な要素である。

(34)



このような行為者を表す *by*-phrase が、行為者に言及しない受動態と結合して、いわば付加的に、行為者を指定する、というわけである。[5]

2. 通言語的ヴォイス・システム

能動態と中間態の対立に関して、他動性の対立として捉えるのが一般的である。典型的な能動態は、行為者と被行為者が異なるために他動性が高く、中間態は、基本的に行為者と被行為者が同一の場合（reflexive, cf. 1a）からの拡張であるから他動性が低い。従って、能動態はそのプロトタイプ、中間態はその周辺（他動性は限りなくゼロに近い）ということができる。つまり、能動態と中間態の「意味的対立」は、具体的には、他動性に関する典型

と周辺の対立と見なすことができるわけである。しかし、他動性の対立は、実は意味量（より厳密には卓立部）の大小に直結している。他動性の高い能動文は行為者と働きかけを含むため、意味量が多く、他動性の低い中間態はこれらを含まず、意味量が少ない。これは、英語の受動態で観察された通りである。

これに対して、能動態と受動態は一般に、事象内のいずれの参与体を主語として選択するかということであり、文法関係の問題である。スペイン語や英語の場合を含めて、認知文法や認知構文論の観点からすると、いずれの参与体に注目するかという認知的際立ちの問題である（Langacker 1990b，中村 1997b）。つまり、事象を構成する行為連鎖において、その始端参与体（行為者）がまず注目されそこに認知的際立ちがあればその事象は通常能動態で表現される（「軍隊が町を破壊した」）。一方、行為連鎖の終端参与体（被行為者）がまず注目されそこに認知的際立ちがあれば受動態で表現される（「町が破壊された」）。このように、能動態と受動態の対立は、際立ちという認知的要因を典型的に反映する文法構造や構文の問題である。

さらに、意味内容とそれを構築する概念形成者という観点からすると、他動性は、意味量と相関することから分かるように、意味内容に関する情報である。それに対し、際立ちは明らかに概念形成者（話し手）の捉え方（construal）の問題である。従って、能動態と中間態の意味的対立とは、叙述内容に関する対立であり、能動態と受動態の文法的対立とは、注目や認知的際立ちなど概念形成者の認知的要因に関する対立である。

さて、中間態（あるいは中間態に類する形式）が受動態へと史的に発達していくという類型論的に観察される変化は、意味的対立から文法的対立への変化であり、文法化（grammaticalization）とみなすことができる。そして意味的対立と文法的対立を上述のように捉えると、中間態から受動態への拡張は、叙述内容を表す言語形式が、認知的要因を表すようになる過程だということになる。文法化は、意味的には、意味の漂白化・抽象化として捉えられることが多いが、このような表面的な捉え方では、(1d)から(1f)へのように、あるいは(4b)から(4c)のような意味の増加を伴う拡張に惑わされることになる。middle から passive への本質的な拡張（文法化）の過程を捉えることはできない。

意味の漂白化というような付随的な特性で文法化を捉えるのではなく、より本質的に、意味内容を中心に表す表現が、際立ちなどの認知的側面を表すようになる過程として捉えると（しかも、語彙的要素が叙述内容を表す度合

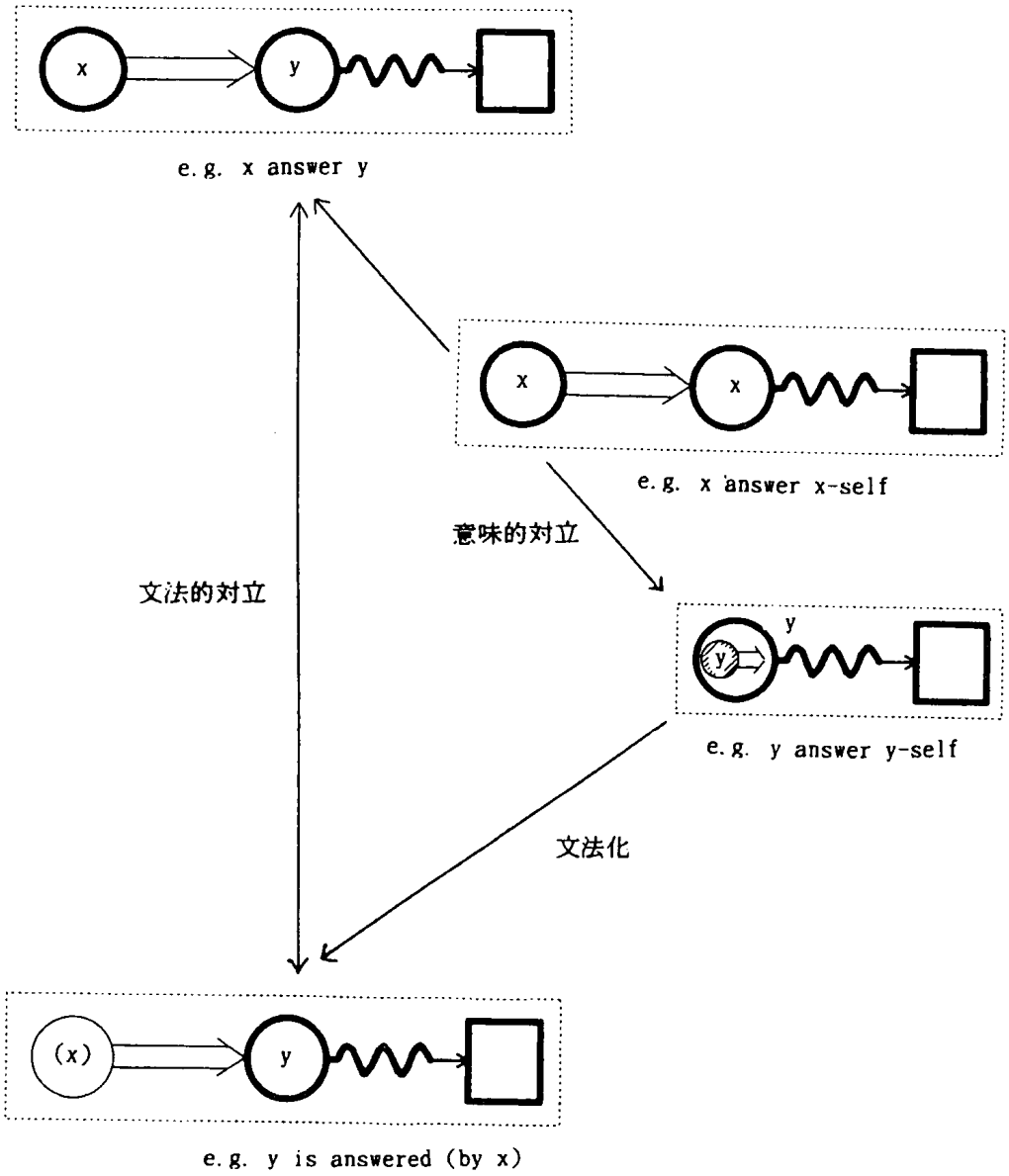
が高く、文法的要素は認知的側面を表す度合が高いことを押さえておけば、cf. 中村 1997a)、中間態から受動態への文法化を自然に説明することができる。文法化で重要なことは、言語表現が際立ちなどの概念形成者側の認知的要因を表すようになる点であって、意味内容の減少は、それに付随する現象でしかない。文法化に意味の漂白化が伴うのは、言語表現が認知的側面を中心に表すようになり、意味内容を表さなくなるためである。

ここで、中間態から受動態への変化を再度見てみよう。英語の受動態の認知的分析で明らかになったように、対象の状態変化を内包する動詞（例えば(1)の例文に現れる break, construct, solve のような動詞や(4)の destroy のような動詞）だけではなく、kick/touch/know のような対象の状態変化を表さない動詞が受動態には現れる得る。さまざまな動詞が現れるようになった段階で、受動態が確立したと言えるのであるが、この段階の受動態は、能動態の lm を tr へ昇格させる機能しかない。意味内容を問題にしないのであるから、通常は受動態の創発（emerge）には意味の漂白化が伴うことになる。具体例としての(1d)と(1f)、あるいは(4b)と(4c)との意味量を比べると、(1d)より(1f)の方が、また(4b)より(4c)の方が、「働きかけ」を表している分だけ意味量が多いように見える。しかし、個々の具体例に惑わされてはいけない。一般的な構造として、英語の be＋p.p. 形式は「be 動詞＋p.p. の形容詞的用法」から「be＋p.p.形式の受動態」への拡張として捉えることができるわけであるが、この拡張は、「～は～になる」という単なる be 動詞を用いた叙述形式から、「～される」という意味を表す受動態への文法化でもある。この文法化では、「状態変化」を叙述する表現形式から、能動文の第二際立ち参与体（目的語）を第一際立ち参与体（主語）として表す表現形式への文法化であり、換言すると、意味内容を云々する表現形式（単なる語彙の結合）から、際立ちという認知的要因を云々する表現形式（文法形式）への文法化である。このように、認知的要因を表す表現形式へと展開する過程が文法化の本質であれば、意味内容の漂白化などは付随的な現象になる。こうしてみると、文法化に係る個々の具体的な例（トークンのレヴェル）では、意味量が増加するように見えても、一般的な構造（パターン）のレヴェルでは、意味量が減少している（少なくとも、意味内容が問題にされない）ことが理解できると思う。

ここで能動、中間、受動の3者の関係、すなわち、能動態と中間態の意味的対立、能動態と受動態の文法的対立、さらには中間態から受動態への文法化を、認知構造を用いて図示してみよう。まず、能動態（x answer y）と中

間態 (y answer y-self) の対立は、他動性と意味量に関して、能動態がプロトタイプ、中間態が周辺という対立であるが、この対立を (35) のように、能動態の認知構造を左上に置き、中間態を右下に置いて示してみよう。

(35) 能動態、再帰構文、中間態、受動態の認知構造ネットワーク



この対立は、他動性がいわば「百パーセント」の場合と他動性が「限りなくゼロパーセント」に近づく場合の対立であるから、柴谷(1997b)の対比最大化の原理に従った対立である。(この対立が、他動性という意味内容に関する対立であるから、意味的な対立であることはここでも想起しておきたい。)ところで、「自らが自らに働きかけて自らを変化させる」(e.g. He killed him-

self.）といういわゆる再帰構文（x answer x-self）には、中程度の他動性が認められるから、この表現形式は、能動態と中間態の間に置くことができる。次に、能動態と受動態（y is answerd）の文法的対立は、能動態の認知構造の直下に受動態を置いて示すことにしよう。最後に、中間態から受動態へ文法化を、矢印で示すと、最終的には、(35)のような四者(能動態、再帰構文、中間態、受動態の）間の関係図が得られる。

先に触れたように能動態と中間態の対立は、他動性と意味量に関する対立であるから、意味的対立である。そして、能動態の他動性が「百パーセント」、中間態の他動性が「限りなくゼロパーセント」に近いから、最大の意味的対立になっている。一方、能動態と受動態の対立は、意味量が変化せず、基本的に際立ち(tr)の位置だけが変わる変化であるから、文法的な対立である。しかも、その対立は、行為連鎖の始端に際立ちがある場合と、終端に際立ちがある場合の対立であるから、最大の対立を成していると言える。例えば、行為連鎖（e.g. He hit the ball with the bat.)の中間にある道具（the bat)に際立ちがある場合と終端(the ball)に際立ちがある場合とでは、際立ちは最大の対立を成していない。従って、その場合の能動態（The bat hit the ball.)に対応する受動態(＊The ball was hit by the bat.)は成立しない。あくまで、能動態と受動態は最大の対立でなければならない。再帰構文や中間態に対応する受動態が成立しないのも、再帰構文/中間態と受動態とが最大対立を成さないためである。意味的対立にも、文法的対立にも、「対比最大化の原理」が作用している。

この図を見ると、再帰構文(x answer x. e.g. He answered himself/his own question.）から中間態(e.g. y answer y. e.g. The question answers itself.)への変化に関して、(第一の際立ち参与体(tr)が x から y へ移行しているから)一見したところ際立ちが行為者から被行為者へ移行し、これは文法的な拡張（文法化）ではないかと思わせる。この辺の微妙さも、中間態についていろいろな論議が生じる原因の一つである。しかしこれは、英語の受動態の認知分析で指摘したことと関連し、中間態の基本的機能は、能動態の認知構造の変化の部分のみを卓立化（profile）するということであり、それに伴って、変化する参与体が際立っているだけである。その際立ちは中間態のメインの機能ではない。

また子細に観察すると、能動態(e.g. She answered him/the question.)にしても、再帰構文にしても、中間態にしても、その主語(と目的語)には、参与体間の際立ちの対比が忠実に反映されている。つまり、使役構造に沿っ

て、最初に注目される際立ちの強い参与体が主語で、その次に注目される参与体が目的語で表されるというパターンはいずれも同じである。能動文の場合は、もちろん、行為者が最も際立ちが高く主語で表され、その行為者の働きかけを受ける被行為者が次に際立ち、目的語で表されるのがふつうである。再帰構文では、関与するのは一つの参与体だけであるが、その一つの参与体がいわば自己の分化を起こし、行為者としての自己が被行為者としての自己に働きかけをしていると解釈すれば、この場合も、前者が際立ちが強く主語で表され、後者が目的語（再帰代名詞）で表されることになる。中間態の場合も、再帰構文の場合同様、参与体は一つであるが、参与体が通常被行為者であるような参与体である点で再帰構文とは異なっている（cf. He answered himself. vs. The question answers itself. ）。しかし、この場合も、参与体 the question が二重の捉えられ方がされている、つまり、その質問の内的側面（その質問の性質）と外的側面（単なる質問としての側面）に分けて捉えられているとみることができる。そして、その質問の性質（内的側面 y）がその質問があたかもひとりでに解決するように仕向けているとすれば、ここにも一種の因果連鎖が認められ、質問（y）が自ら（y-self）を解決に導びくというような表現になる中間態も、一種の因果連鎖を認知ベースにしていると言うことができる（関連する認知構造の表示法について詳しくは中村（1995）参照）。一見中間態の主語は能動態や再帰構文の場合と異なっているようであるが、それぞれの主語・目的語がどのような認知的際立ちを反映しているかという観点からすると、いずれの場合も、その主語・目的語は、基本的に参与体間の自然な際立ちの対比を忠実に反映し、基本的には、主語は際立ちの高い（因果連鎖の）始端を、目的語は際立ちの低い（因果連鎖の）終端を表している。

これに対して、能動態（あるいは再帰構文と中間態）と受動態の違いは次元を異にする。すなわち、受動態は（多くの場合談話上の理由から）際立ちの低い被行為者をあえて主語として表し、際立ちの強い行為者を無視しようとする、いわば自然な際立ちの強弱に逆行する表現形式である。能動態、再帰構文、中間態が、際立ちの強弱と主語・目的語の対応関係を同じくし、他動性の度合を異にするだけであるのに対し、受動態はこれらとは、いわば際立ちと文法関係の対応関係が逆であり、その点で次元を異にする言語形式である。柴谷（1997b）は、このような点を基に、能動態と中間態は（文法的には同種だが）意味的に対立する表現形式であり、能動態と受動態は文法的な対立だとしているように思われる。能動態に対して受動態は有標構文とされる

が、有標構文は、一般に、主語・目的語の選択が（何らかの形で）自然な注目の流れや際立ちの対比と逆行するが[6]、受動態はまさにそのようなケースの一つである。[7]

3．結語

認知文法の枠組みでは、認知ベース上の卓立部が言語化され、その卓立部のなかの第一際立ち参与体(tr)が主語で、第二際立ち参与体(lm)が目的語で表される。「卓立部」と「tr/lm」は際立ちのレヴェルを異にする。例えば「x が z から y を五ドルで買った」という状況は、どの側面を卓立部とするかによって、x buy y, z sell y, x pay $5. y cost $5. などの表現が可能であり、buy を卓立部とする状況で、x を tr にするか、y を tr するかによって、x buy y と y be bought の表現が可能である。以上の概念を基にすると、本稿で明らかになったのは次の諸点である。(i)能動態と中間態の意味的対立とは、前者が、働きかけと対象の変化を卓立部とし、後者が「変化のみ」を卓立部とするということ。(ii)能動態と受動態の文法的対立は、使役構造の働きかけをする参与体と働きかけを受ける参与体のいずれを tr とするかの違いである。(iii)中間態から受動態への変化とは、「卓立部」に係わる言語形式から、「tr/lm の選択」に係わる言語形式への転換である点を特徴とする。(iii)で一見、意味増加したように見えるのは、中間態が受動態として用いられる際に、働きかけをも表すためであるが、しかし中間態が受動態として定着する（すなわち、パターン化する）と、参与体の際立ちしか問題にしないから、事実上意味は減少し、意味の漂白化が生じている。第1節で英語の受動態の認知構造ネットワークを、第2節で通言語的なヴォイス・システムの認知構造ネットワークを提案したが、類型論的考察に有効であろうと思われる。

注

1．本稿でのネットワークの基本的な捉え方について、詳しくは中村(1993、近刊)参照。

2．しかし、(4)の3種類の認知構造で、英語の be ＋ p.p. 構造が歴史的に、(4a)から(4b)へ、それから(4c)を表すようになったのであれば、be ＋ p.p. 構造は、「変化後の状態」を表していた形式が「受動態」という形式として確立した、ということになる。しかし少なくとも、いわゆる中間態の意味を表す段階（4b）があったことは間違いない。

3．認知文法では、構成要素の意味の和が、合成構造の意味のすべてとは見なされない。合成構造の意味には、コンテクストの意味も含まれ、その点に、意味論と語用論とが連続的で、言語的意味と百科辞典的意味も連続的であるという観点が反映している。

4．専門的には、一方のスキーマ部を、他方のより具体的な意味が精緻化する(elaborate)と言う。

5．厳密には、モノ（THING）としての行為と、過程（PROCESS）としての行為は、認知構造として、区別する必要があるが、ここではその区別が大きな意味をもたないので、その区別は無視している。

6．とりわけ英語の有標構文で、受動態は自然な際立ちの対比が逆転して捉えられる場合であり、また結果構文（例えば The joggers ran the pavement thin.）の目的語や二重目的構文（例えば、She peeled me an apple.）の間接目的語に、動詞とは無関係の参与体が現れることがあるのは、ある種の参与体が概念形成者にとって新たに第二際立ち参与体（lm）として際立ってきた場合である（中村（1997b、近刊）参照)。

7．中間態と受動態がどんなに意味内容が似ていても、受動態から中間態へ拡張しないのは、中間態から受動態への拡張が文法化であり、文法化と呼ばれる拡張が、叙述内容を表す表現が認知的側面を表すようになる過程であって、その逆の拡張過程が認知的にあり得ないからと言えよう（文法化の不可逆性、cf. Bybee, Perkins, and Pagliuca 1994)。つまり、中間態も受動態も、意味内容だけに注目すると、いわば「なる」的表現（あるいは非対格的表現）として捉えることもできるわけだが、それならなぜ、受動態から中間態への拡張も生じないかというと、両者の次元が違うために、認知的に一方向への拡張しか生じ得ないためだというわけである。もちろん、日本語でも「れる・られる」が「自発」から「受身」へと拡張し、その逆でないのも、この現象だけ見たのではなかなか説明がむずかしいが、同じ理由によるとしてよいだろう（ただし、日本語には参照点構造がからんでいる。cf 中村（1998))。

参考図書

Barber, C. 1994. The English language: A historical introduction. Cambridge:Cambridge University Press.

Bolinger, D. 1975. On the passive in English. LAUCUS 1.57-80.

Bybee, Joan; Revere D. Perkins: and William Pagliuca. 1994. The evolution of grammar. Chicago: University of Chicago Press.

Carey, Kathleen. 1995. Subjectification and the development of the English perfect. Subjectivity and subjectification, ed. by Dieter Stein and Susan Wright, 83-102. Cambridge : Cambridge University Press.

Denison, David. 1993. English historical syntax. London:Longman.

Givon, Talmy and Lynne Yang. 1994. The rise of the English GET-passives. Voice: Form and function, ed. by Barbara Fox and Paul Hopper, 89-117. Amsterdam: Benjamins.

Heine, Berne, Ulrike Claudi, and Friederike Hünnemeyer. 1991. Grammaticalization: A

conceptual framework. Chicago:University of Chicago Press.
Hopper, Paul J, and Elizabeth C. Traugott. 1993. Grammaticalization. Cambridge: Cambridge University Press.
Kemmer, Suzanne. 1993. The middle voice. Amsterdam:Benjamins.
——. 1995. Emphatic and reflexive *-self*: expectations, viewpoint, and subjectivity. Subjectivity and subjectivization, ed. by Dieter Stein and Susan Wright, 55-82. Cambridge : Cambridge University Press.
Langacker, R.W. 1990a. Subjectification. Cognitive Linguistics 1.5-38.
——. 1990b. Concept, image, and symbol. Berlin & New York:Mouton de Gruyter.
——. 1995. Raising and transparency. Language 71.1-62.
——. to appear. On subjectification and grammaticization.
Osmond, Meredith. 1997. Why do we say "fed up with" but "sick and tired of". The language of emotions, ed. by Susanne Niemeier & Rene Dirven, 111-133. Amsterdam:Benjamins.
Shibatani, Masayoshi. 1985. Passives and related constructions: A prototype analysis. Language 61.821-48.
——. 1988. Voice in Philippine languages. Passive and voice, ed. M. Shibatani, 85-142. Amsterdam:Benjamins.
——. 1998. Voice parameters. Kobe Papers in Linguistics 1.93-111. Also in Typology of verbal categories, ed. by L. Kulikov and H. Vater. Tuebingen:Niemeyer.
Tomlin, Russell S. 1997. Mapping conceptual representations into linguistic representations: The role of attention in grammar. Language and conceptualization, ed. by Jan Nuyts and Eric Perderson, 162-89. Cambridge: Cambridge University Press.
Traugott, Elizabeth C. 1995. Subjectifcation in grammaticalization. Subjectivity and subjectivization, ed. Dieter Stein and Susan Wright, 31-54. Cambridge:Cambridge University Press.
Washio, Ryuichi. 1995. Interpreting voice. Tokyo:Kaitakusha.
金水 敏. 1991. 受動文の歴史についての一考察. 国語学 164.1-14.
———. 1992. 欧文翻訳と受動文-江戸時代を中心に-. 文化言語学, 文化言語学編集委員会編, 547-562. 東京:三省堂.
久野 暲. 1983. 新日本文法研究. 東京:大修館書店.
柴谷 方良. 1997a. Parameters of grammatical voice. 講演於金沢大学.
———. 1997b. 言語の機能と構造と類型. 言語研究 112. 1-32.
高津 春繁. 1954. 印欧語比較文法. 東京:岩波書店.
高見 健一. 1997. 機能的統語論. 東京:くろしお出版.
中村 芳久. 1993. 構文の認知構造ネットワーク. 言語学からの眺望. 福岡言語学研究会編. 247-68. 九州大学出版会.

———. 1995. 構文の認知構造ネットワークの精緻化. 金沢大学文学部論集文学科篇第15号. 127-146.
———. 1997a. 認知的言語分析の核心. 金沢大学文学部論集言語・文学篇第17号. 25-43.
———. 1997b. 認知構文論. 英語のこころ(山中猛士先生退官記念論文集). 225-240. 東京：英宝社.
———. 1998. 認知類型論の試み：際立ちと参照点. KLS Proceedings 18. 252-62.
———. 近刊. 二重目的語構文の認知構造—構文内ネットワークと構文間ネットワークの症例—. 認知言語学論集. 山梨正明他編. 東京：ひつじ書房.
山梨 正明. 1995. 認知文法論. 東京：ひつじ書房.